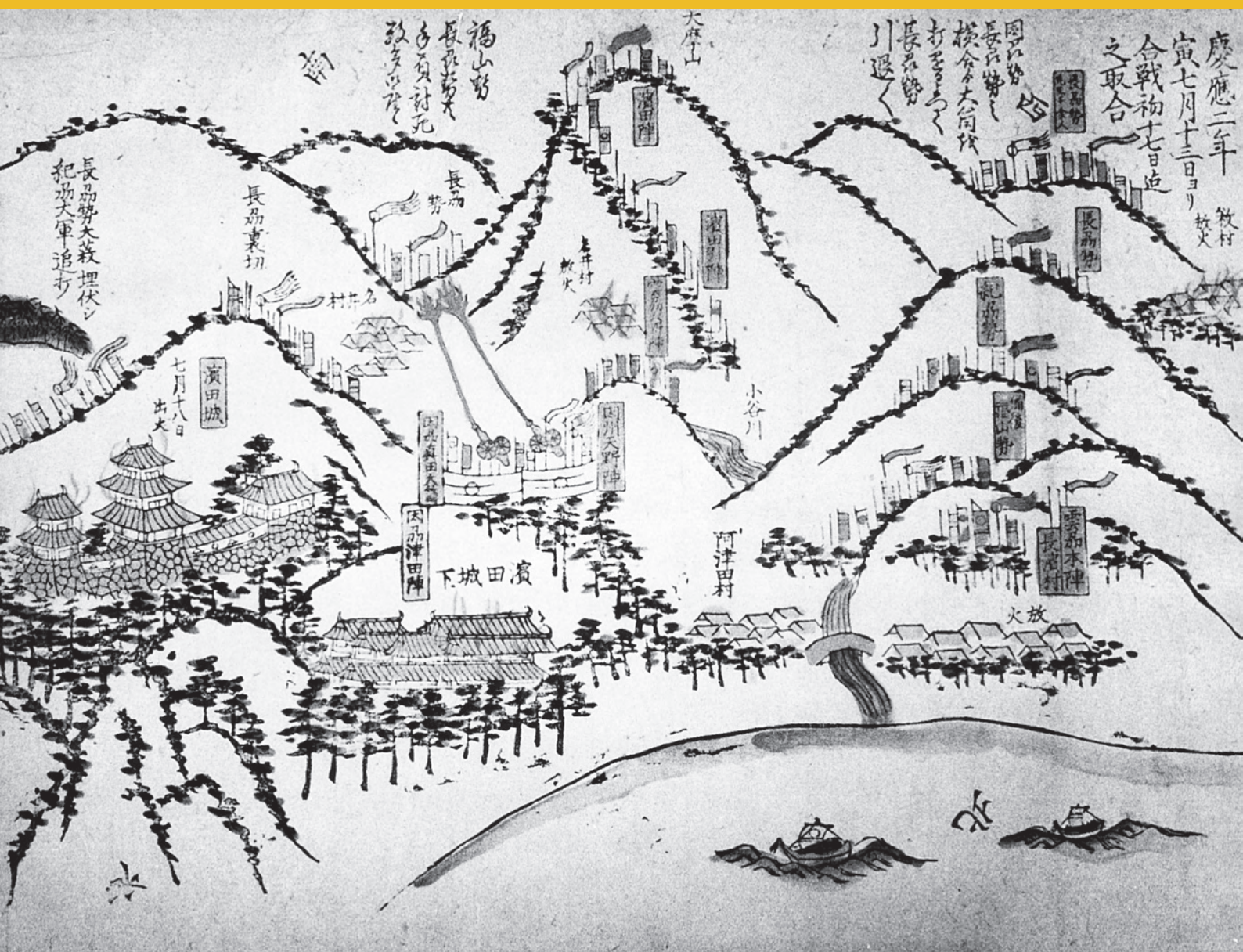
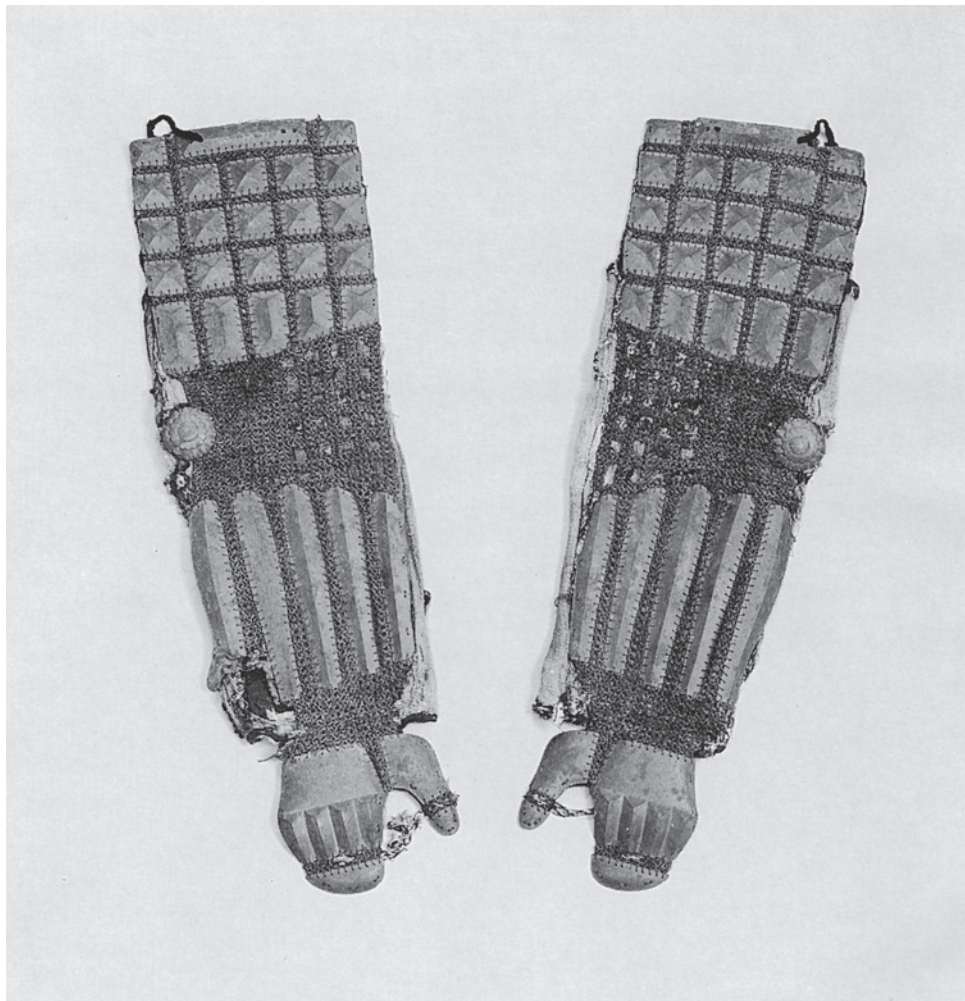


岸静江とその時代

激動の幕末と浜田藩



浜田市教育委員会



岸 静 江 国 治 着 用 籠 手

一筆 岸上治郎 向幸 御覽
 此の籠手は、静江国治の着用したもので、
 静江国治の墓に埋められていたことが書か
 れている。また、墓の建立についてもふれられてい
 る。
 明治2年10月5日に多田村庄屋の城市安太から岸家に宛てた手紙。岸
 静江が着用していた籠手をはずし、山中に埋めて隠していたことが書か
 れている。また、墓の建立についてもふれられている。

城 市 安 太 書 状

明治2年10月5日に多田村庄屋の城市安太から岸家に宛てた手紙。岸
 静江が着用していた籠手をはずし、山中に埋めて隠していたことが書か
 れている。また、墓の建立についてもふれられている。

ご あ い さ つ

平成8年12月7日、茨城県土浦市にお住まいの岸汎宣様から、岸静江国治の遺品など107点もの貴重な資料を浜田市に寄贈頂きました。当教育委員会では、この度これら貴重な資料を市民の皆様披露するため、「浜田のたからものー浜田の武士・岸静江ー」展を開催し、その図録を刊行いたしました。

岸静江国治は、慶応2年(1866)の第二次長州征伐(石州口)において、長州軍の進撃を阻止せんと一人立ちは大かたて壮絶な死をとげた浜田藩士であります。

大村益次郎の数奇な生涯を描いた司馬遼太郎先生の作品『花神』にも登場しております。この幕末の浜田を象徴する岸静江国治に関連する資料の他にも、徳川斉昭などが浜田藩主松平武聡に送った書状や明治初期の鶴田藩関係資料など激動の幕末から明治初期の資料も多く含まれております。

市民の皆様には、これらの資料により、明治維新という激動の時代に生きた岸静江国治やその家督を継いだ岸新六などを通して、大きく揺れ動いた浜田藩と鶴田藩を具体的にご理解いただくとともに、郷土である浜田に新たな思いをめぐらせていただければ幸いに存じます。

本展を開催するにあたり、貴重な資料をご提供いただきました所蔵者をはじめとして、ご指導、ご協力いただきました多くの皆様に深く感謝申し上げます。

平成9年9月6日

浜田市教育委員会

教育長 竹 中 弘 忠

目 次

I	城下町・浜田	1
	(1) 浜田藩の歴史	1
	(2) 浜田城	2
	(3) 浜田城下	3
II	幕末と浜田.....	6
	(1) 浜田藩主 ー松平右近将監家ー	6
	(2) 揺れる時代と浜田藩	8
III	第二次長州征伐と岸静江.....	9
	(1) 石州口の戦	9
	(2) 岸静江国治	10
	(3) 扇原の攻防	12
	(4) 浜田城自焼退城 ー牛尾弘篤日記を中心としてー	15
IV	浜田藩から鶴田藩へ	18
	(1) 鶴田藩	18
	(2) 岸新六と鶴田藩	20

I. 城下町・浜田

(1) 浜田藩の歴史

浜田藩は、元和5年(1619)に古田重治が5万5千石(石見国5万石丹波国5千石)の所領を与えられて、伊勢国(三重県)松坂から転じてきたのに始まる。

古田家は重治・重恒の2代が、この地を治めている。重治は浜田に來ると直ちに領内各地を検分し、浜田の亀山を適地として元和6年(1620)から築城に着手した。そして、浜田川右岸に武家屋敷、左岸に浜田八町と呼ばれる町割りを行って、城と城下の整備をすすめ、現在の浜田の基本的な町形態を築いている。しかし、2代重恒にはあと継ぎがなく、古田騒動と呼ばれるお家騒動がおこり、重恒の死後、領地は没収されて断絶した。

慶安元年から同2年(1648～1649)まで三次(広島県)の浅野、津和野の亀井の両家が城を預かっていたが、次に松平周防守康映が宍粟(兵庫県)から転じてきた。松平周防守家は前後2回、約180年間浜田の地を治めている。前期は康映・康官・康員・康豊・康福の5代である。この周防守家の浜田への転封は、徳川政権の中国地方への進出と監視という重要な役割を担っていた。

17世紀末は新田開発がさかんに行われ、元禄7年(1694)には初めての藩札が発行されている。また、康豊の時代には有名な鏡山事件が江戸屋敷でおこったり、内村庄屋善左衛門、吉地村庄屋三郎右衛門らによる減免嘆願のための騒動が各地で発生している。

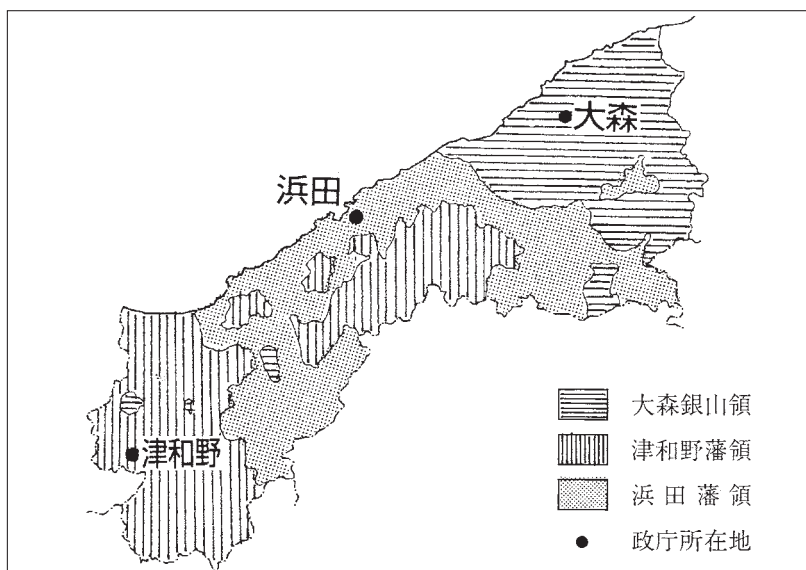
康福は宝暦9年(1759)に寺社奉行となり、古河(茨城県)へ転じ、代って本多中務大輔家の忠敵・忠盈・忠肅の3代が治めたが、10年後の明和6年(1769)に、当時岡崎(愛知県)にいた周防守康福が再度浜田に転じてきた。この間、九カ寺宗論という浄土真宗と密、禪、浄の他宗との間に宗教論争がおきている。この事件は、石州門徒と呼ばれる程の深い信仰心を育て、多くの妙好人を生む等人々の教化に大き

な影響を与えている。

後期周防守時代は康福・康定・康任・康爵の4代、しかも康福・康任は老中に就任して幕府内に大きな勢力を誇示しており、浜田藩の政治、産業、文化等の各方面においてもみるべきことが多い。特に初期蘭学の発達、康定の好学、本居宣長の高弟小篠敏と多くの門人、そして藩校長善館の創設、柿木山の植林、たたら産業の保護、石見半紙の専売制といった国産奨励等があげられる。しかし、その一方では慢性化した藩財政難の打開が急を告げていた。

こうしたなかで発覚したのが竹島事件である。藩主康任は事件発覚に先立つ天保6年(1835)10月に仙石家の家督問題に連坐し、老中を免ぜられ、翌7年には棚倉(福島県)へ転じ、代って館林(群馬県)から松平右近将監家が浜田に転じてきた。

右近将監家は斉厚・武揚・武成・武聡の4代が藩政を担ったが、幕末という時代の流れは急激で、慶応2年(1866)7月、第二次長州征伐により長州軍が進攻し、自焼退城という運命をたどることになる。再起を図るため、浜田藩の飛地であった鶴田(岡山県)の地に移り、浜田藩から鶴田藩に改称したが、明治4年(1871)の廃藩置県により藩を解散した。



幕末の石見三領配置図

(2) 浜田 城

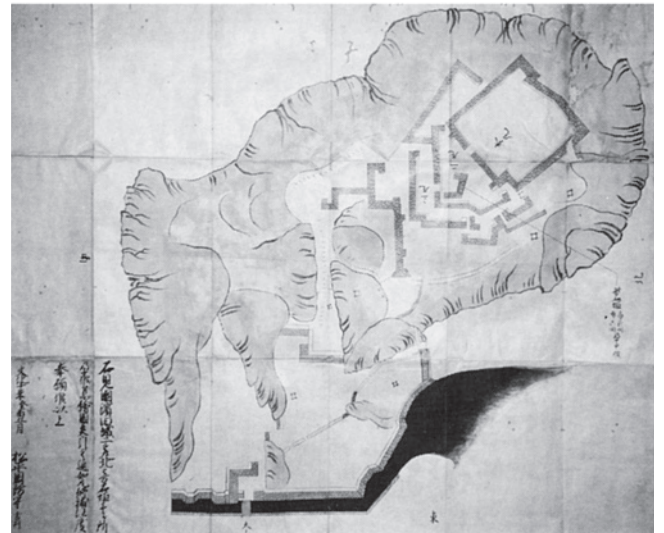
浜田が城地として選ばれた大きな理由として、この地が15世紀後半には石見国内の重要な港町として発展していたことがあげられる。これは要害の地であることを前提にしつつも政治的・経済的意図をもって決定されたといえる。その城下町の拠点となる浜田城は、浜田初代藩主古田重治が浜田に転じてきた翌年の元和6年(1620)に着工しており、元和元年(1615)の一国一城令後の数少ない築城となる。

浜田城は平野のなかほどにある標高67mの独立丘陵「亀山」に築かれた平山城である。南から西にかけては城を取り囲むように浜田川が北流し、北には松原湾、東には約30~40m幅の内堀をへだてて、武家屋敷が広がっていた。

浜田城の構造は、山頂から南東側山麓へ向けて石垣が重なりながら広がる梯郭式となっており、山頂に置かれた本丸は、一ノ門と塀によって囲まれ、その北西隅に三重櫓と呼ばれる高さ約14mの天守がそびえていた。それに続く中腹の二の丸には、櫓形石垣に多門造りの二ノ門があり、山麓の谷開口部には多門造りの中ノ門及びその石垣上に多門櫓があった。この二つの城門の間に煙硝蔵、本丸常番所、時打ち番所等がある。中ノ門東側の山麓に広がる三の丸は、北側に裏門や米蔵、東側に大手門、そして南側には藩主の住居兼政庁の南御殿があり、その他にも酒や味噌、椀等の蔵や役所、番所等が並び建っていた。



浜田城 (浜田城下町絵図 浜田市教育委員会 蔵)



文化10年浜田城石垣絵図 (個人 蔵)



浜田城絵図 (浜田市立浜田図書館 蔵)

(3) 浜田城下

浜田が城地に決定されると、厳しい身分秩序と防衛上の観点から浜田川以北に「丸ノ内」と呼ばれる上級武士の武家屋敷を置き、浜田川以南には、中級・下級武士の居住区と防衛拠点となる寺社及び商工業にたずさわる人々の町屋を計画的に配置して、「^{はまだ はちちょう}浜田八町」と呼ばれる都市が築かれた。

浜田八町は、^{こんやまち}紺屋町・^{しんまち}新町・^{えびすちょう}蛭子町・^{かたにわちよう}片庭町・^{かどがつじまち}門ヶ辻町・^{ひものやちよう}桧物屋町・^{はらちよう}原町・^{つじまち}辻町からなり、その後、慶安3年(1650)には^{ひよう}日庸町・馬場町・土取場町・中島町・^{おけや}桶屋町・^{うしろ}後町等の町名が見え、天明元年(1781)には^{かこ}水主町・^{たかべや}鷹部屋町・^{ささや}笹屋町・^{なか}中原井・本原井等の町名が見えることから、城下がしだいに整えられていったことがうかがわれる。

紺屋町・桧物屋町・桶屋町(飯田町)・日庸町の町名は職人の由来からきている。商人町は、辻町・桧物屋町一帯が当初中心であったが、新町・蛭子町へと中心が移った。新町には藩札を扱う「銀札引換所」「銀札場役所」が開かれ、蛭子町では食品、日用雑貨等多くの店が集まり賑わっていた。また、鍛冶屋・農具・金物・荒物・雑貨・食堂等が城下東側出入口の牛市・田町・^{びわ}琵琶町で繁盛した。

浜田八町を対象とした天保5年(1834)の「浜田町民生業調査」(『浜田町史』)によると、総戸数が734戸で、そのうち同一業種が20戸以上あるものは、米穀20・菓物22・洗濯23・荒物

49・^{ぼて}棒手39・大工43・日雇83・畑作り74となっている。また、天保9年(1838)の『巡検使^{おたずねのおもむきおこたえもうしあげ}御尋之趣御答申上候覚写』では家数596・土蔵290・人数1901とある。

武家屋敷は一丁田・馬場土手・笹屋町・鷹部屋町・新高部屋・原井・杉戸等にある。寺社については、城下の出入口部分の要所に配置され、特に城下西側の原町・真光町一帯に集中している。また、城下には直浦と呼ばれる^{じきうら}浜田浦・松原浦の漁師町が組み込まれ、外^{みなと}ノ浦湊、瀬戸ヶ島湊、長浜湊では物資と情報の窓口として城下の経済的発展を促進させた。

松平右近将監家時代に描かれた「^{うこんしやうげん}浜田城下町^{ちやうかん}鳥瞰図」は、道を行き交う人々や家並み、番所、高札場等までもが精確に描写されており、城下の様子や景観を視覚的に知ることができる。



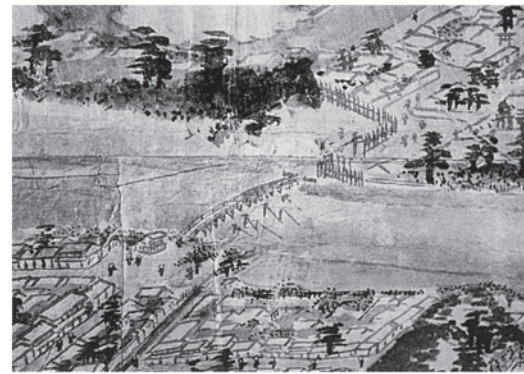
浜田城下町絵図 (川越市光西寺 蔵)



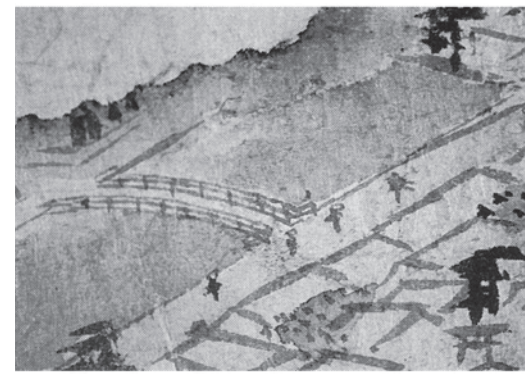
浜田城下町鳥瞰絵図 (個人 蔵)



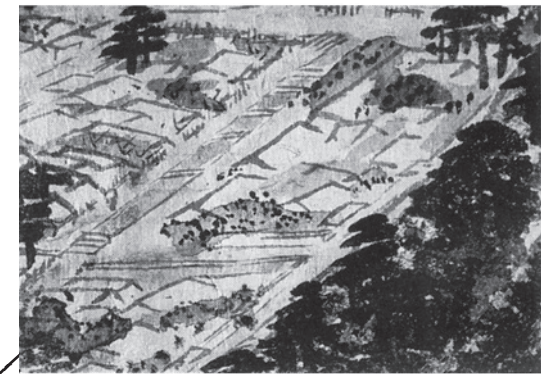
鍵 道 (山陰道)



新町、大橋、大橋門



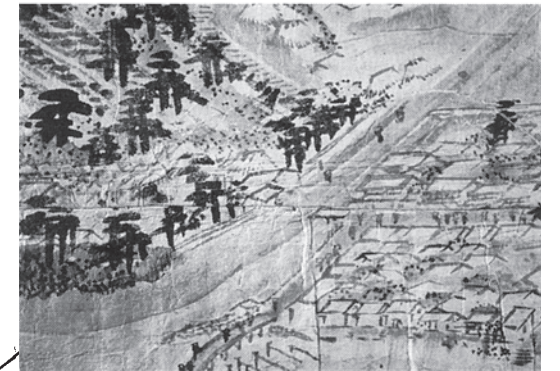
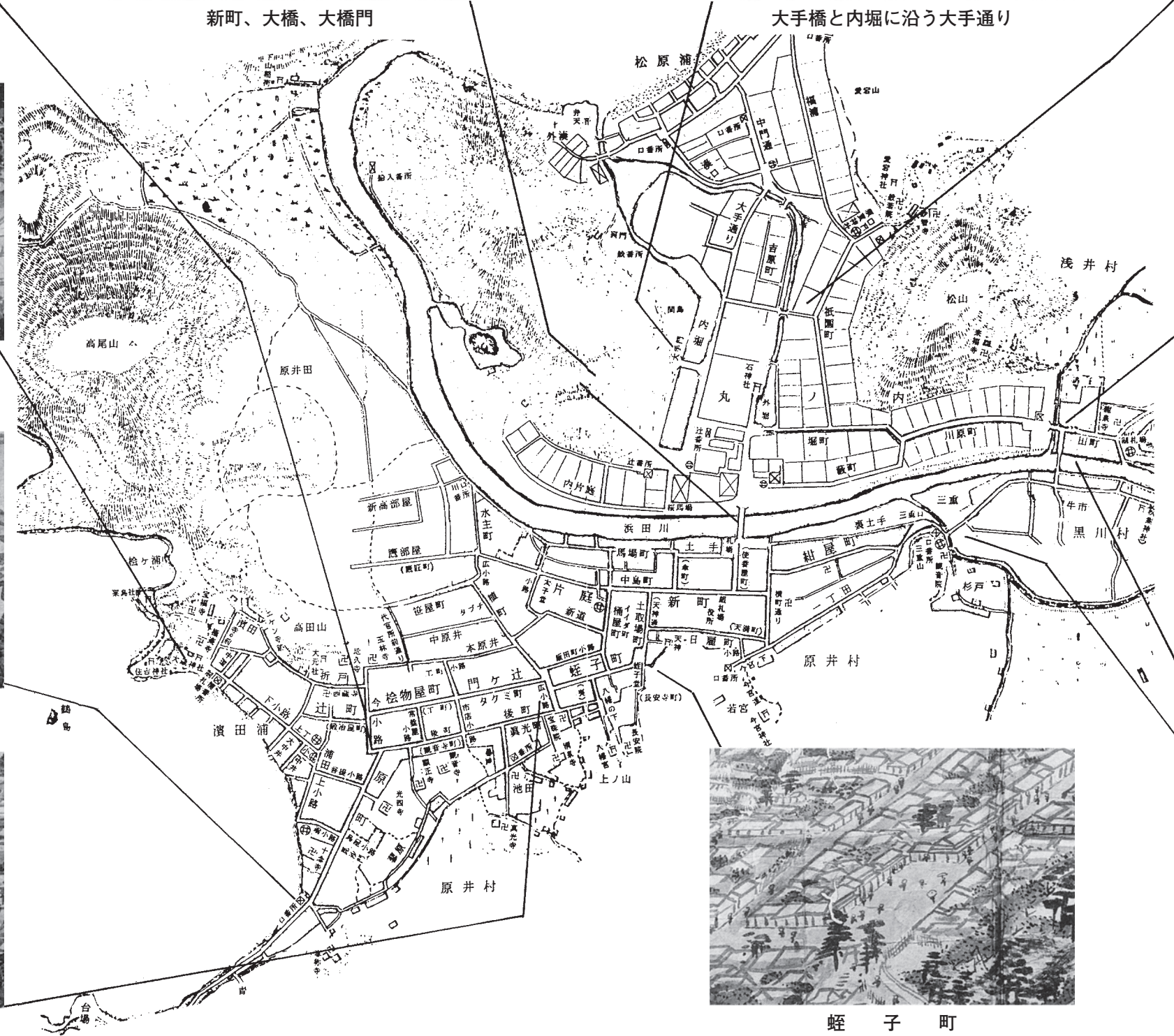
大手橋と内堀に沿う大手通り



岸 家 宅 (中 央)



浜 田 浦 (大歳神社前)



浅井川と田町口門



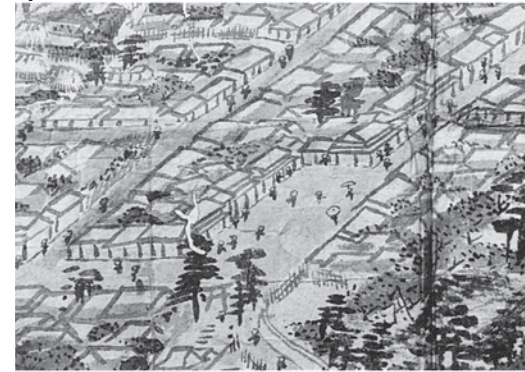
青 口 口 番 所



牛 市 と 田 町 橋 (相生橋)



広 小 路



蛭 子 町



三 重 口 番 所

浜田城下町鳥瞰絵図から見た幕末の浜田



Ⅱ. 幕末と浜田

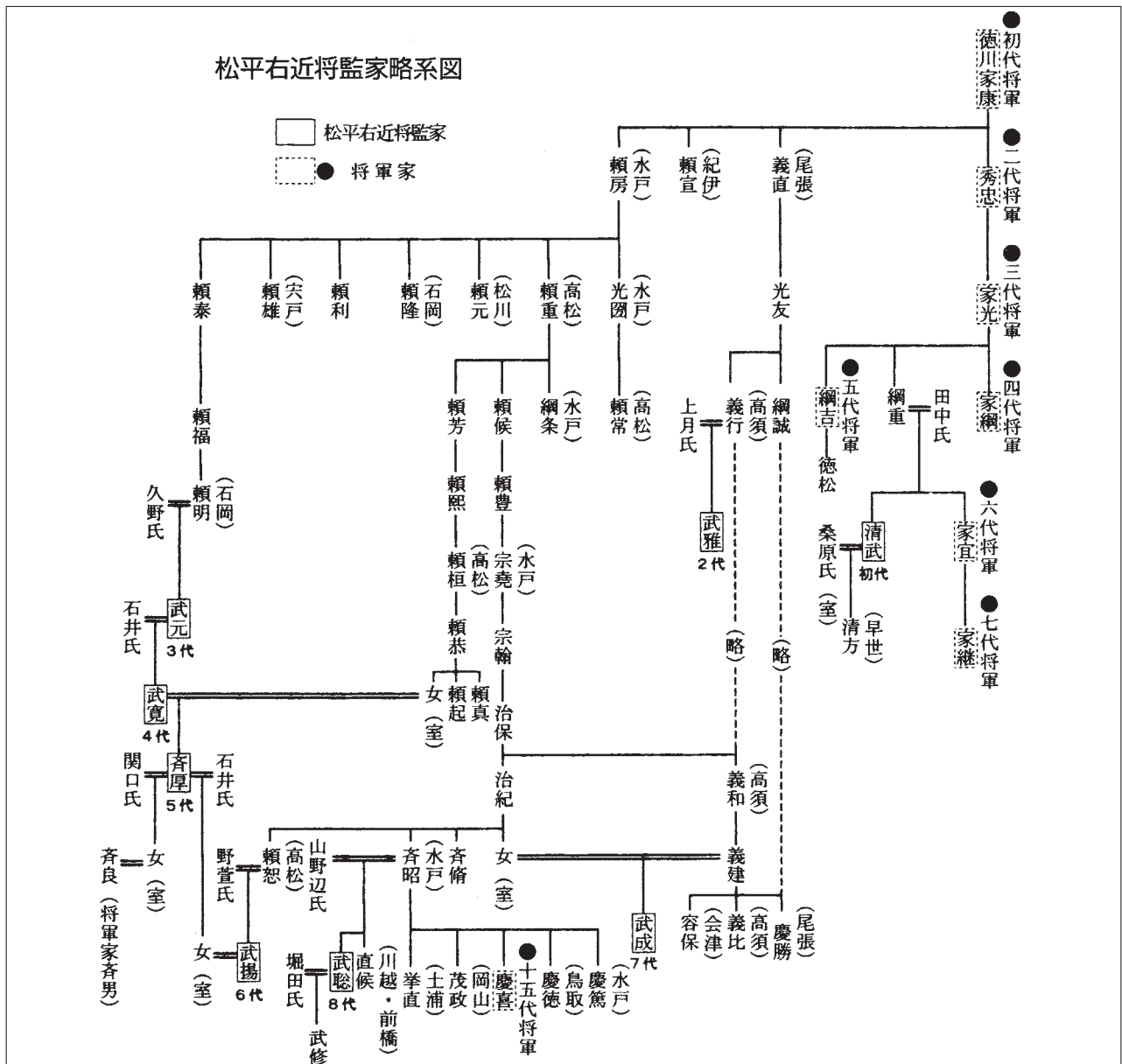
(1) 浜田藩主 一松平右近将監家一

慶応2年(1866)まで浜田城主であった松平^う右近将監^{こんしょうげん}家は、甲府宰相徳川綱重^{つなしげ}と側室於保良^{お ちよ ぼ}(田中氏)の第二子、清武^{きよたけ}が宝永4年(1707)に松平^{こうずけ}の称を賜り、大名として上野国館林^{たてばやし}を拝領したことから始まる。

三代将軍徳川家光の後、家光の長男家綱が
四代将軍となり、次子綱重は甲府城、末子綱吉
には館林城が与えられた。綱重は早く没したの
で、家綱の後綱吉が五代将軍となった。綱重と
於保良の第一子は甲府の遺領を受け継いでいた。
家綱・綱吉ともに継ぐ子がなかったので、綱重

の長子が将軍家の養子となりいえのお家宣と名を改めた。

清武は寛文2年(1662)に生まれ、故あって越智喜清に預けられ、同家で成長したので「越智^{おち}松平^{まつだいら}」とも呼ばれる。清武は家光の孫として処遇を受け、箕田屋敷を与えられ石高も加増されていった。宝永3年(1706)1万4千石の大名に取り立てられると、それまでの尾関・岸など二十数人の家臣の外に新たに多くの侍を採用し、翌年館林を拝領して2万4千石の藩主となった。宝永6年(1709)兄家宣が五代将軍になり、清武も侍従となり石高も加増された。3代武元^{たけちか}の明





永 康 倉 (浜田市立松原小学校 蔵)

和6年(1769)には6万千石となった。

始祖清武の子清方が早世して家光の血を引く系がなくなった。松平家は実子に恵まれぬ事多く2代武雅と7代武成は尾張徳川家から、3代武元・6代武揚・8代武聡は水戸徳川家から養子を迎えている。松平右近将監家は代々幕府の要職に就いてきたが、特に武元は將軍吉宗・家重・家治の3代33年間の長期老中を勤めた。

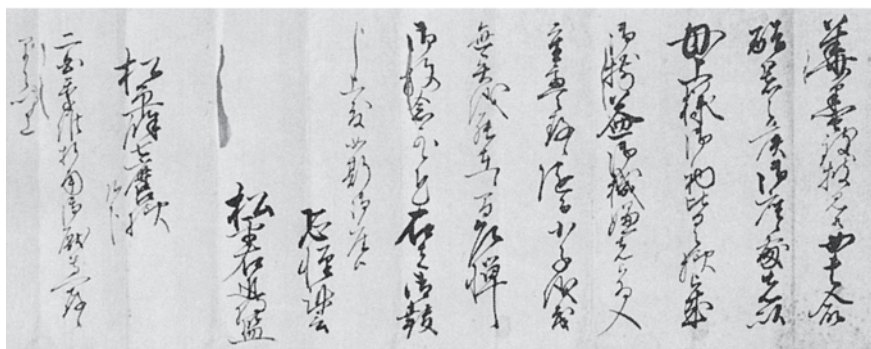
松平家は館林入封後清武－武雅－武元と続き、享保13年(1728)から陸奥棚倉へ転封となったが、19年間在藩の後再び館林に戻った。以後武元－武寛－斉厚と続き前後112年間館林藩主として過ごした。

天保7年(1836)石見浜田へ転封となり、浜田では斉厚－武揚－武成－武聡と続くが、幕末の激動期を迎える。時の藩主武聡は幕末の日本に

大きな影響を与えた水戸烈公(齊昭)^{なりあき}の子で浜田に養子にきた人である。兄弟に鳥取藩主慶徳、15代將軍慶喜^{よしのぶ}、岡山藩主茂政などがいる。安政5年(1858)武聡が初めて浜田へお国入りの時、父齊昭の出した書簡があり、上は損しても下が益する様に。夷狄^{いてき}が海から迫っているので注意する様に。自分独りでは何事も出来ないので士民協力して当る様にといったことが記してある。

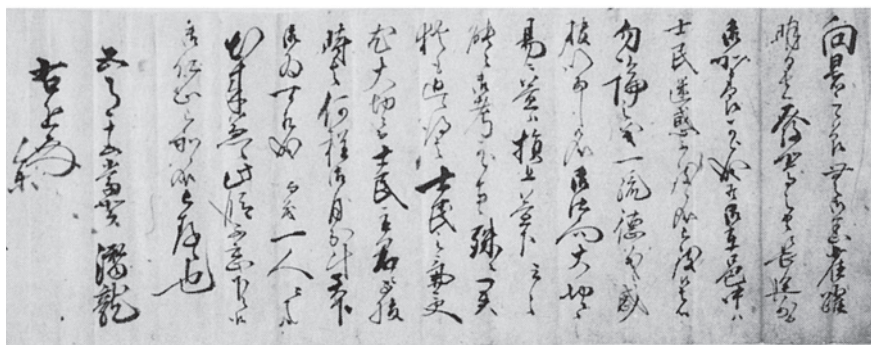
親藩である浜田藩は慶応2年(1866)の第二次長州征伐に参加し、自焼退城となって、31年の治政を終える。美作の飛領地に移り、慶応4年(1868)に鶴田藩と改称したが、明治4年(1871)に廃藩置県となり藩の幕を閉じた。

藩政については、館林、浜田とも農業収益の多い所ではなく享保・天明・文政・天保の飢饉には対策に苦慮し「飢え夫食」「御救小屋」や朱子社倉法による「永康倉」を造るなどの諸策を行った。財政が赤字に転落すると儉約令を出し緊縮に努めた。浜田移封時経済は疲弊し藩札の価値は無に等しかったが、殖産振興に努めている。歴代藩主は学問を奨励し、朱子学山崎派の道学を好み、斉厚は藩校道学館・官渝舎^{かん ゆ しゃ}を設立している。小藩ながら学問に熱心な藩であった。



松平右近将監家書状

武聡から弟の松平餘七麿宛への書状。餘七麿は後に土浦藩主寅直の養子となる。



潜龍書状

父、潜龍(徳川齊昭)から初めてお国入りする息子の武聡に宛てた書状。

(2) 揺れる時代と浜田藩

江戸時代も幕末になると、土地経済は崩れ貨幣経済へ移行するなかで、幕府権力も次第に衰え、尊王思想が起り、外国船の近海出沒により攘夷運動がとなえられた。ペリーの浦賀来航により結ばれた日米和親条約等、これを批判する思想弾圧の「安政の大獄」と日米修好通商条約を受けて、井伊直弼が暗殺された「桜田門外の変」が起り、「公武合体」の大老安藤信正襲撃へと続き幕府の権威も失墜した。尊王攘夷論を主唱した水戸藩は藤田東湖、水戸斉昭の死後、外様大名の雄藩長州・薩摩・土佐の諸藩に受けつがれ、幕政批判は盛んになった。

長州藩は尊王討幕に転じ、王政復古をとえ、尊王攘夷派の公家と図って攘夷親征、王政復古を画策したが、薩摩藩は將軍家と姻戚関係を結んで中央政界へ進出を図り、京都守護職松平容保（会津藩主）と共に朝議の一変を画策して、長州藩の禁門警護を免じてこれに替わった。長州藩も勢力の回復をきして、元治元年(1864)7月に藩兵を上京させて入京を乞うたが許されず、会津・薩摩・桑名の諸藩と戦ったが敗れた(禁門の変)。

浜田藩は文久3年6月に攘夷の推進を幕府に建白、同4年には長州の暴走を許す事は遺憾としながら、余り窮地に押さえ込むのも危険なこととして諸藩に意見している。浜田藩は青口・松原に砲台を築造したり、軍事訓練などして戦争に備えていたが、経済立て直しの最中であり、軍備を十分に調えることは出来なかった。

幕府は元治元年8月、第一次長州征伐を号令し、諸藩を中国地方へ派遣した。浜田藩は益田



聖徳寺本堂弾痕（周布町）

に鳥取藩は三隅にまで兵を出してこれに備えた。

長州藩は英仏米蘭の連合艦隊によって下関を砲撃されるなど、内外の敵を受け、戦わずして三家老の切腹により幕府に謝罪した。これによって、長州征伐は一時治まったかに見えたが、その後長州は高杉晋作を中心として奇兵隊をつくり藩論を一新して軍備を調えた。

これに対して幕府は威信をとりもどすために、慶応元年(1865)4月、第二次長州征伐を号令した。しかし、外交問題や薩摩の動向等ですぐには実行されず、その間に土佐の坂本龍馬・中岡慎太郎等の画策もあって、慶応2年(1866)1月21日に薩長同盟が密約された。同盟約を知らない幕府は6月に長州藩領周防国大島郡を砲撃し、以降、芸州口・石州口・小倉口へ兵を進めた。

長州と隣合わせの浜田藩は、石州口と呼ばれた藩境を固めて警戒をし、幕府の軍目付や石州口の総督紀州藩、福山藩・松江藩・鳥取藩の来援を受けた。

年 代	日 本	浜 田 藩
弘化4 (1847)		12. 武聡が浜田藩主となる
嘉永元 (1848)	品川に砲台を築く	河鑄景岡 財政改革を行う
安政元 (1854)	3. 日米和親条約	
文久3 (1863)	5. 幕府攘夷を決断 5. 下関で外国船砲撃	5. 海岸防備指揮役を任命 6. 武聡、幕府に攘夷を提言 青口、外ノ浦に砲台を築造
元治元 (1864)	7. 禁門の変 8. 第一次長州征伐 11. 長州藩、幕府に謝罪 12. 高杉晋作下関挙兵	8. 鳥取藩主に攘夷と 征長の推進を促す 11. 浜田藩・鳥取藩出陣
慶応元 (1865)	1. 薩長同盟成立 4. 諸藩に長州再征の令 11. 福山藩石見へ発進	1. 長州藩に備え益田へ出陣 11. 福山軍師 浜田・益田を下見
慶応2 (1866)	6. 第二次長州征伐 芸州口、石州口 小倉口で交戦 7. 將軍家茂没 8. 討長総督休戦の令	6. 9 一ノ手益田へ向け出陣 6.13 毛利追討勅諭が来る 6.16 長州軍、石見に侵入 6.17 益田で幕長戦 7.18 浜田自焼退城 7.29 武聡松江に入る 9. 浜田奪回を計画

日本・浜田の幕末略年表（弘化4年～慶応2年）

Ⅲ．第二次長州征伐と岸静江

(1) 石州口の戦

慶応2年(1866)5月、幕府より浜田藩^{いくさめ}の軍目付^{つけ}として三枝刑部^{さいぐさぎょうぶ}が浜田極楽寺を本陣とし到着し、6月6日ころより福山藩の一番手と二番手は益田へ、浜田藩の片岡隊・松倉隊は遠田・津田に着陣した。

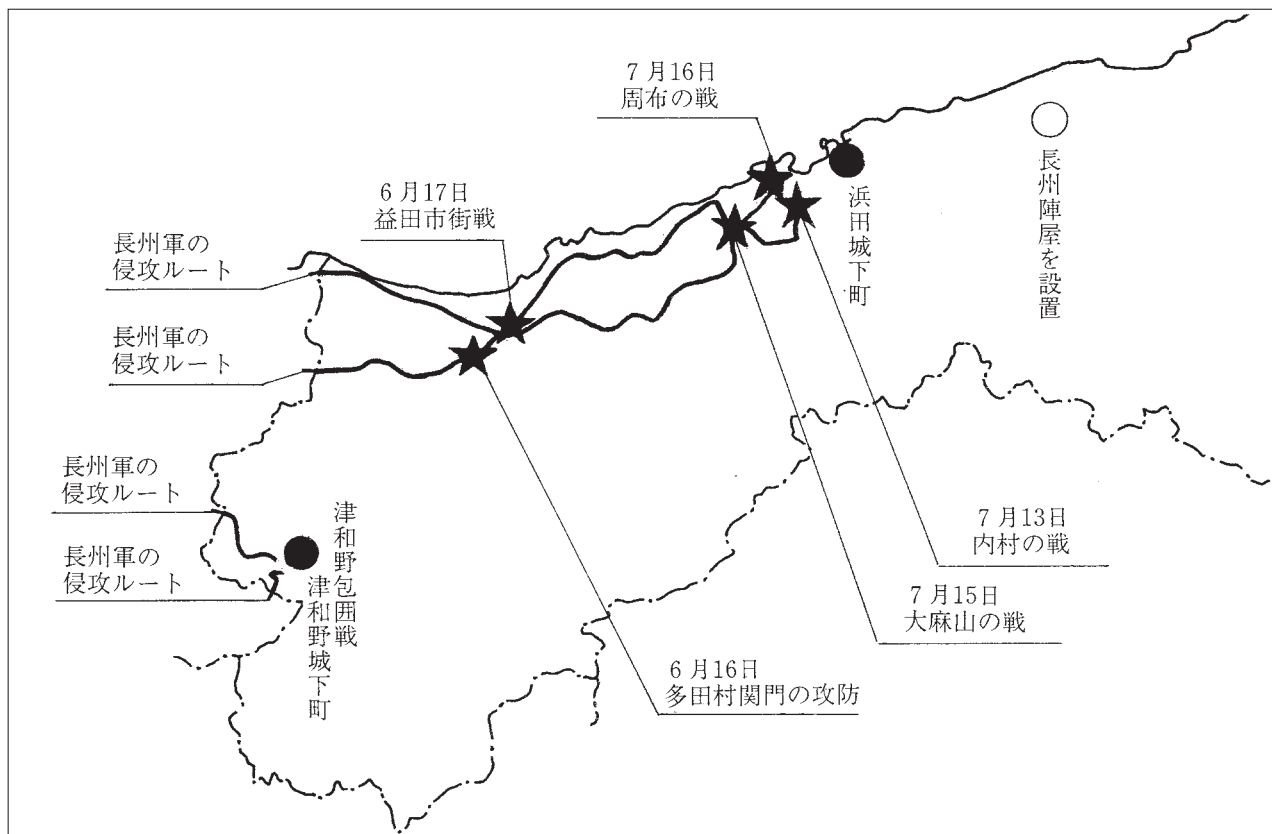
長州軍は京都を目指して、15日の夜半から仏坂・土床・嘉年・野坂の4ヶ所の国境から、いっせいに石見国に進入した。津和野攻めは杉孫七郎、益田攻めは滝弥太郎が大将となり、参謀として大村益次郎が指揮をとった。

津和野藩は兵を城中に集めて戦わずの姿勢を取ったため、津和野包囲戦は停止状態となり、北部に進入した長州軍は難なく東進して、16日昼ごろに多田村関門を押して通って益田に進入。福山藩と小競り合いとなった。翌17日再び益田で激しい戦となり、多くの死傷者を出して幕府軍は退却した。津田辺まで来ていた紀州先鋒隊は一戦もせず退いている。

長州軍は津和野に入っていた幕府軍目付の引渡しを要求したため、一時戦線は中休み状態となったが、7月に入ると再び浜田に向け進軍してきた。ここで「浜田侯にもうす」で始まる開戦の書を送り、浜田藩に対して他意はなく、京都への道を仮りとの趣旨が述べられている。

浜田藩は大麻山、福山藩は麓^{ひばり}の雲雀山、後から援軍として入った松江・鳥取両藩は長浜・内田村方面へ陣をしいた。13日に内村で長州軍の陽動作戦があり、15日には大麻山の総攻撃を受けかん落。16日は周布聖徳寺^{とか}を本陣とする紀州藩も長州軍と交戦、周布川渡河により敗走した。

その後吉地の太谷邸に本陣を構えた長州軍と浜田藩の間で和平交渉が行われたが、長州の条件が厳しくて決裂し、諸藩も兵を引いたので18日には浜田藩は自焼退城のやむなきにいたった。長州軍は翌19日に浜田城下に進駐し、引続き江津に陣屋を設けて、東からの防衛にあたった。



石州口の戦経過図

(2) 岸静江国治

岸静江は天保7年5月(1836)今の群馬県館林市で松平右近将監家臣の家に生まれた。通称を静江といい、いみな(本名)は国治という。

生後わずか半年で国替えとなり、祖父国均、父源太夫国道と共に、はるばる浜田まで引越してきた。

岸家は越智松平家の初代清武が部屋住みであった元禄のころからの譜代の家臣で、藩の中核をなす上士の家柄である。そのため、浜田では丸の内と呼ばれる武家屋敷街である祇園町(今の殿町8町内)に住んでいた。

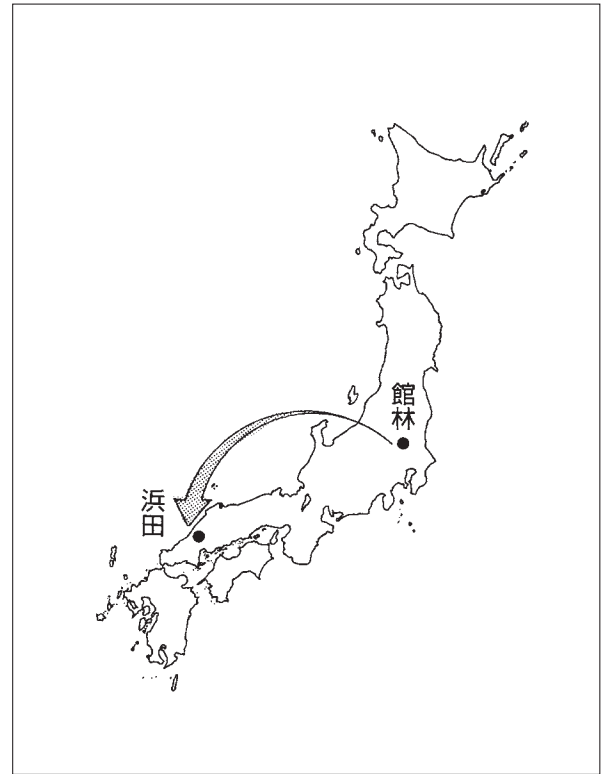
静江は幼いころから文武の道を励む優秀な人物であり、殿町にある藩校道学館で、朱子学を学び、また静江は国学や和歌も熱心に修めており、和歌の短冊や書籍も残されている。また『靖献遺言』や『常山紀談』を愛読したという。

藩では静江に江戸への遊学をさせている。江戸では遊び歩く少年達も多かったが、静江は時を惜しんで勉学に励み、家は貧しかったが質素倹約で、余裕があれば武具などを調えたという。浜田に帰って安政6年(1859)4月、成績優秀により弟新六、金七郎と共に藩主から表彰されている。城中三の丸にあった南御殿において、読書、講書、素読と武芸を藩主の御前で披露し、おほめの言葉と酒料理を賜っている。

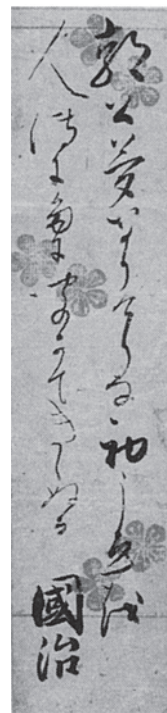
家には2～3の使用人がいたが、静江はこの人達にも人の道をとく、勉強をすすめる、また刀を与えたりしている。岸家にいた中村友太郎は静江から直接刀をいただき、かつ勉強するようにといただいた手本の書が、友太郎の郷里益田に今も大切に保管されている。

静江は元服すると父源太夫に付き添われて藩主に初御目見えの礼を行った。安政6年6月(1859)藩校教授高木馬之助の娘と結婚した。安政7年1月(1860)初めて藩へ召し出され、同年5月には抜擢されて近習席という藩主のそばで働く仕事についた。時の藩主は武聡である。

岸家では慶応2年5月7日、父源太夫が隠居して名を如円と改めた。静江は家督を継ぎ、藩の一部署を預かる物頭という大事な役目につい



館林と浜田位置図



岸静江国治 和歌一首

郭公 夢なりけりな 初こゑを

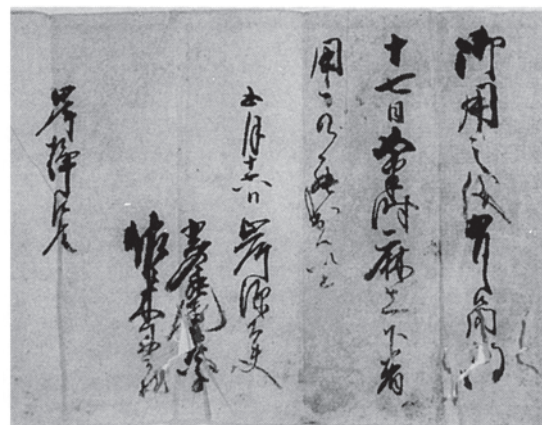
人傳にだに 聞かで ききぬる 国治

た。同月27日には、藩境にある多田村扇原おおぎはらの関門に関門の頭として赴任していった。

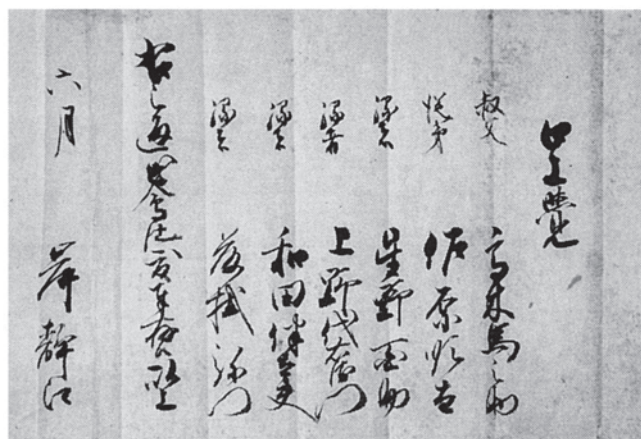
ここで悲壮な死を迎えることになる。

岸静江の死は、幕末の激動の中であって、地方を守るべく身を賭してその持ち場を守り、時代に流され埋没していったのではなく、この時代に積極的に参画したといえる。

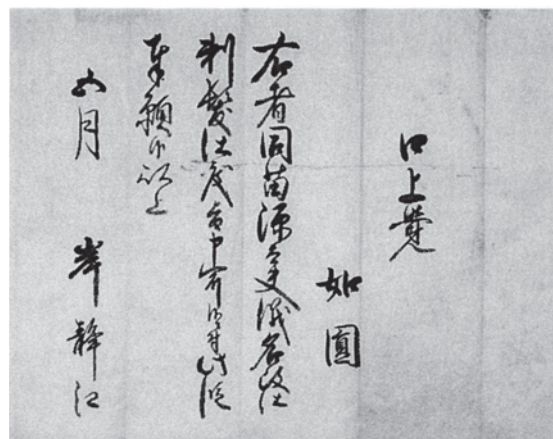
藩は明治2年2月、^{ひのえとら}丙寅の役、^{たいせつ}戦死の大節、^{ばん}志操拔群の儀と評し感賞をおくるとともに、^{かしらせき}番頭席に昇給させている。また武聡の子、^{たけなか}武修は岸静江の行為に深く感涙し、関門での出来ごとを詳しく調べ『浜田会誌』に発表し、関門で行動をとにした島田代三郎らに聞きこの時のようすを高橋松亭に描かせている。岸家に対して一幅の書を贈り“石見潟 あれのみまさる 汐風に ぐだけて清き きしのしら浪”とよんでその意をあらわしている。



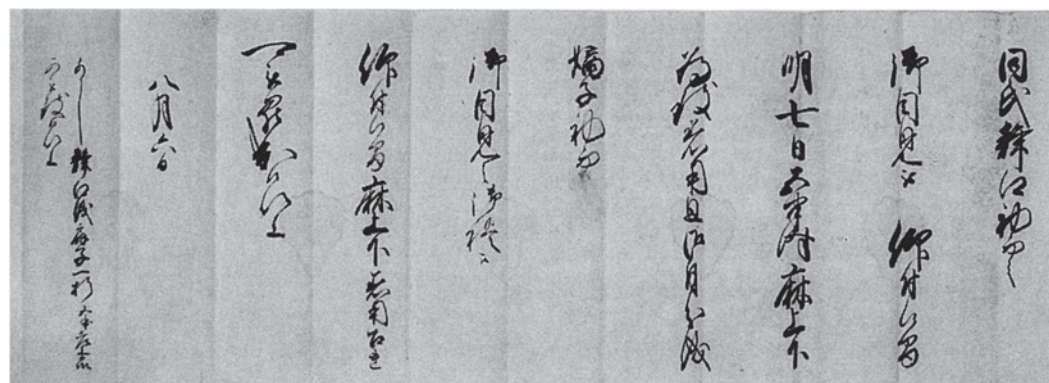
万延元年近習呼出状



安政6年6月口上覚



慶応2年5月口上覚



岸静江初御目見呼出

『明細分限帳』

【岸家 静江の項を抜粋読み下し】

- 一、 同（岸） 静江 国治
- 一、 安政七年庚申正月十五日 御近習席召し出され、御給人勤仰せ付けられ候。五人扶持之を下す。
- 一、 万延元年庚申五月十七日 御近習仰せ付けられ候。
- 一、 慶応二年丙寅五月七日 同氏源太夫家督百拾石之を下され、格式御物頭席、勤方御取次仰せ付けられ候。
- 一、 同年六月十六日 多田村関門に於て長州人と戦い候節討ち死。三拾七歳。
- 一、 同年同月々 多田村関門に於て、令（長官）防戦討ち死候段御聴に達し、忠節の段御感じ思し召し候。然る處、男子これ無きに付、親類の内相応の者見立て、養子相願うべき旨父如円江仰せ出され候。
- 一、 同年同月々 弟同姓新六儀、静江養子仕り度き旨、如円願の通り仰せ付けられ候。
- 一、 明治二年己巳二月朔日 丙寅之役、戦死の大節志操拔群の儀深く御感賞在らせられ。依つて御番頭席贈られ候旨之を仰せ出さる。

(3) 扇原の攻防

慶応2年(1866)長州との戦いの時、藩境の関門を守りその侵入を阻止して一人討ち死していった若侍があった。岸 静江、浜田藩士である。

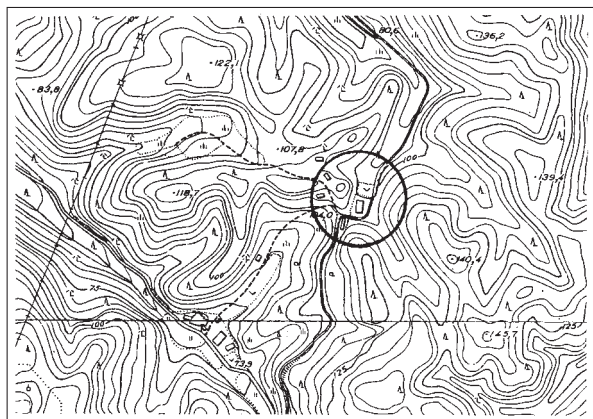
幕府と長州の間が険悪になると浜田藩は西の藩境、津和野街道の峠にある多田村^{おうぎはら}扇原(現益田市多田)に、関門を置き非常の事態に備えていた。慶応2年5月下旬この関門の頭として赴任していったのが岸静江であった。

幕府軍には一の前福山藩、二の見浜田藩・津和野藩、総督紀州藩、応援が鳥取藩・松江藩が命じられた。福山藩の軍師江木繁太郎の戦略で益田の勝達寺・万福寺・医光寺で戦うのが良策としていた。福山藩は益田に、浜田藩は遠田、津田に集結しつつあった。

慶応2年(1866)6月15日夜半、長州藩は突如国境を越えて石見に侵入してきた。土床関門を

突破、東に進めば扇原の関門に至る、16日朝から長州軍近づくとの情報に、岸静江は配下の武士5人を関門の守備につかせた。関門には付近の村から加勢の臨時農民兵も加わって、合わせて20人ばかりであった。静江はまず後方の幕府軍に火急を知らせる伝令を走らせた。この時点での益田では、まだ陣地構築ができておらず、急のこととて勢力を備える間、少しでも時間を稼ぐことが必要であった。

長州軍は津和野藩の抵抗をうけず、横田(現益田市)を経て正午ごろ関門に迫ってきた。長



扇原の関門周辺図



扇原の関門位置図 (益田市)



岸静江 扇原関門の図 (『浜田会誌』第3号から出典)



扇原の関門 (津和野藩領側から望む)

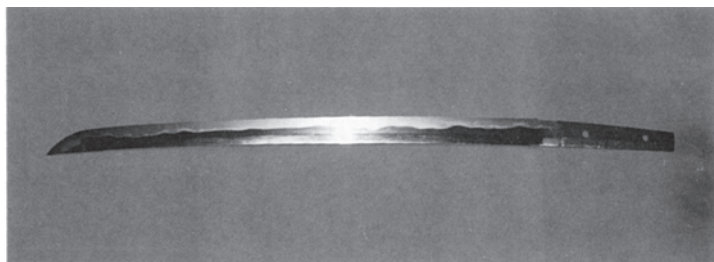
州はまず使者を遣わしてきて「我藩は京都に参上して申し上げたい用件が出来申した。国境に駐屯していた人員を率いてこの関門近くまで来ている。されど、なるべく道を脇にとり、貴城下は通過しない所存でござる、ただこの関門のみ開門を許されよ」と口上した。「拙者どもは公命をもってこの関門を守っておる者でござる。私の一存で勝手には門を開くことは出来ない。是非にもといわれるのなら、直ちに浜田の本藩に報じるから」と答えると。長州の使者は「事は切迫してござる」と関守に開門を迫った、要するに土足で他人の家に上がりますよ……というのに外ならない。静江はきっぱりと「かかる無法は斥けるべし」と、この要求をしりぞけた。

長州軍は狭い山あいから発砲をはじめてきた。関門の守備隊も応戦した。臨時農民兵も岸静江の指揮のもと火縄銃で応戦発砲をした。静江は兜に籠手、すねあてをつけた小具足仕立てで、陣羽織を着て手に十字の槍を持ち泰然として意を決していた。戦いは多勢に無勢やがて臨時農民兵は一人去り二人去りしていった。静江は残った部下にも退去をうながし、犠牲は自分のみでよいと単身関門に踏み留まった。やがて近づいた長州兵に至近距離から撃たれ、弾は胸腹あたりを貫いた。静江は槍の支えですぐには倒れなかったといわれている。わずかな時が過

ぎ……長州兵がおそろおそろ近ずいてみると岸静江は正面をにらんだ姿のまま倒れこときれていた。

関門近くの多田の人々は、岸静江の死をおしみ手あつく葬ったという。またこの地に墓石を立てている。多田村の庄屋はその時着用していた籠手はずし、長州の詮議をのがれるべく山中に埋め置き、明治2年の長州支配がおわってから後に、美作にいた岸家に届けられた。

岸静江は浜田藩の緒戦の戦死者としてたたえられ、今日に語り伝えられている。これは地元民が人柄を慕うとともにその死を悼み、長州軍からは敵ながら天晴れと誉められ、職に殉じた責任感ある士として評価された。浜田藩の関門を守る者として、厳然と筋を通し、勇敢な士として、「武士の鑑」と称賛されたのである。



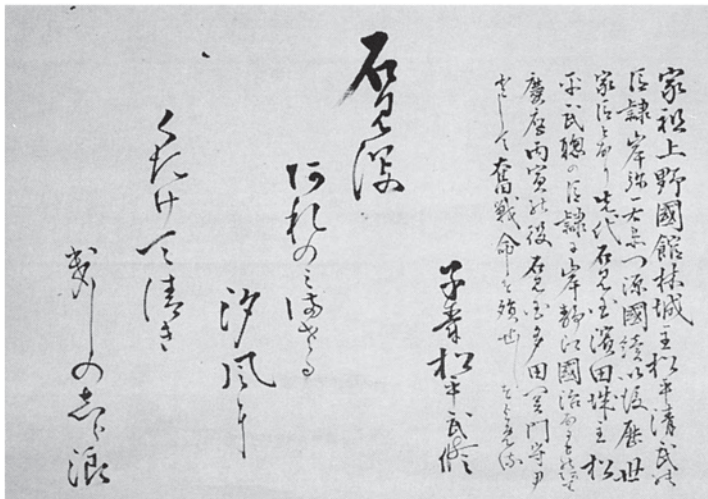
岸静江の脇差 (多田自治会 蔵)

中村友太郎が静江から形見として渡されたもの。
刀長 48.9cm、反り 0.6cm「源祐正 作」の銘がある。

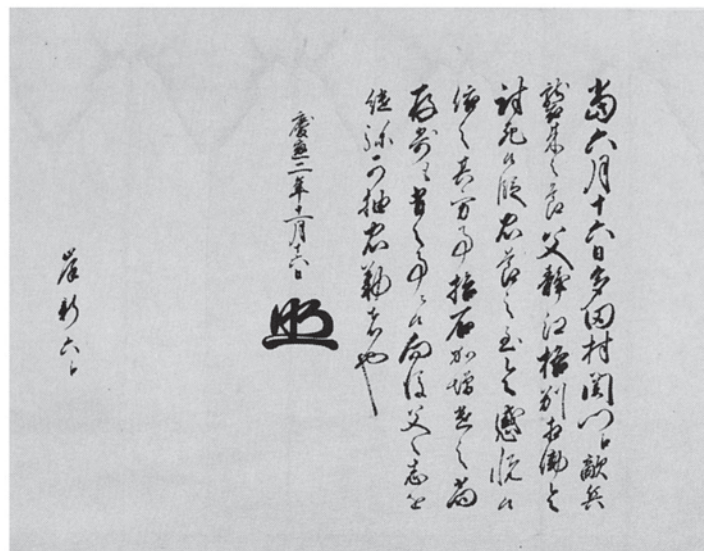
『町方役用帳』

〔慶応二年六月十六日の項を一部抜粋読み下し〕

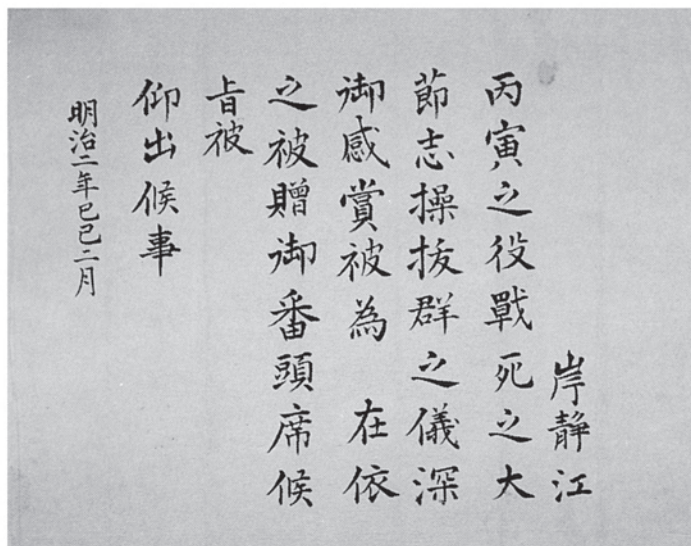
同日昼後多田の関門へ長州勢百五十人計り押来り、一もみに踏潰さんとする時、守頭岸静江、是を喰留んと手銃引提出向い矢庭に老人突伏せ、貳人目は左の太股抜通し押えて首を取らんとす。長軍小筒にて一時打放す其数十玉余も鐘の柄にて受留、尚も進んで突かんとする時、後より飛来る玉葉三、四つも打当られ、流石の岸も多勢敵に取巻れ、悉く炮当りにて身体打破られ、防戦相叶難、腹かき切り、終に討死す。敵ながらも天晴勇士と誉にけり。其外関門の下司五人あれども、てきしがたく落失にけり。



松平武修書付



岸新六御沙汰書



岸 静 江 感 賞

家祖上野国館林城主松平清武の
臣隷岸弥一右衛門源国統以後歴世
家臣となり 先代石見国浜田城主松
平武聰の臣隷に岸静江國治なるものあり
慶應丙寅の役石見国多田関門守尹
として奮戦命を殞せしをよめる
子爵 松平武修

石 見 瀉
阿れのみ満さる
汐風に
くたけて清き
貴しの志ら浪



岸静江国治の墓（浜田市観音寺）



岸静江戦死之地碑（益田市）

(4) 浜田城自焼退城 一牛尾弘篤日記を中心として一

扇原関門を破った長州軍は、益田へと進み、益田川を挟んで、福山・浜田の幕府軍と対陣したが、夕暮れになり横田へ引き揚げた。また長州軍の一隊は海岸部から高津の米蔵を押さえた。

幕府軍には6月16日の朝から長州軍進攻の報が届いていたが、迎撃態勢は後手にまわっていた。同夜浜田藩は万福寺・医光寺に、福山藩は勝達寺に配陣し、前面の益田川を天然の堀とする構えとした。

翌17日昼近くに両軍の撃ち合いが始まり、代官所(現 資料館)付近からの長州軍の攻撃がすさまじいため、幕府軍は椎山から焼玉を打ち込で火災となった。万福寺付近でも門前の民家30～40軒が焼失した。長州軍の優れた装備に対し、浜田藩は旧式の火縄銃が主力であり、長州軍を前に苦戦をしいられた。万福寺で指揮をとっていた山本半弥^{やまもとはんや}は門前に迫った長州軍に対して捨て身の突撃を敢行し、永井金三郎もまた得意の剣で活躍して一時劣勢を挽回した。しかし、裏山の秋葉山に現れた長州軍によって挟み撃ちにあい、再び窮地に陥った。再起を図るために万福寺から後退する途中で、幕府軍目付三枝刑部^{さえぐさぎょうぶ}が狙撃されて討ち死にしたことから、これに責任を感じた山本半弥は切腹した。

益田の戦いでは福山藩14人、浜田藩11人、幕臣3人、長州藩13人の犠牲者が出ている。また浜田藩一の手の大將片岡弾正^{だんしょう}は敗戦の責任を負い、7月2日に三隅の本陣^{ほんじん}で自刃^{ぼうじ}している。一方益田に入った長州軍は「長州領」の榜示

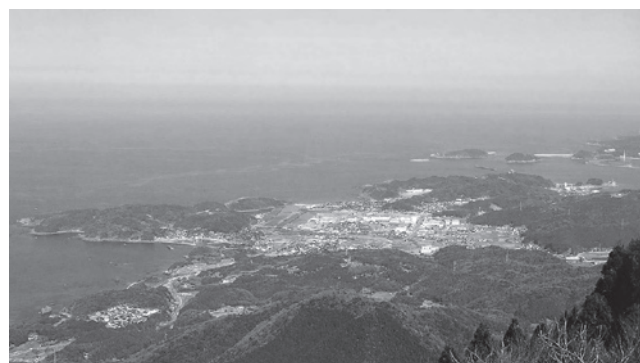
杭を立てて宣撫^{せんぶ}工作に入り、戦局は長期化の様相を呈してきた。

7月上旬、長州側は再び態度を硬化し、大村益次郎を中心として、三隅・浜田方面に進んできた。これに対し、浜田藩・福山藩は浜田近辺に引き揚げ、紀州・鳥取・松江諸藩も浜田近くに集結して周布川を防衛線とした。東から坂辻山・猪伏・塚原山と連なる丘陵に鳥取・松江・

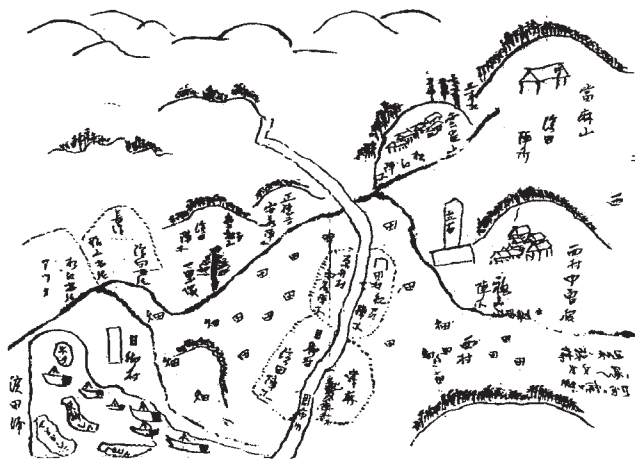


代官所跡

(現在は益田市歴史民俗資料館の敷地となっている。建物は美濃郡役所)



大麻山から望む周布平野



周布戦状況図 (個人 蔵)



大谷邸跡(左下)と周布平野

福山藩が布陣し、紀州藩は周布聖徳寺に本陣を置いた。浜田藩は大麻山に布陣して長州軍を迎え撃つこととした。

7月13日、井野村に進出していた長州軍は、内村方面に出没し、松江藩は激しい攻防の末にこれを撃退した。その時のようすを、当時浜田藩の大砲方として、青口台場に從軍していた社人^{しゃじん} 牛尾弘篤^{ひろあつ}が『御軍役諸事覚日記』の中に詳しく書きとめている。

弘篤は、13日に黒煙が天を覆うのを見て内村が砲火のために焼失したものと思い、急ぎ帰ろうとしたが、砲撃が激しく、帰ることができなかった。翌14日に福山藩兵と共に内村に入り、村人に会って昨日のようすを見聞きしている。

それによると、昨日の本郷の人家焼失は砲火が原因ではなく、松江藩兵による付け火であり、これでは領民の恨みをかい、殿様のためにもならないので、付け火は止めて欲しいと、訴え出たいと相談され、村役人と共に浜田に還っている。

さらに15日に再び内村が焼かれたとの評判で、16日に内村に帰って人家十数軒が焼失したことを知り、村人が避難している場所を訪ねて慰問してから青口台場に引き返している。

一方15日には大麻山でも交戦があり、浜田藩兵1人が討ち死、16日周布では紀州藩が戦火を交えたが、総崩れとなり後方へと退いている。

こうした戦況の中で、苦慮した浜田藩では、停戦交渉に入ったが長州軍の要求は厳しく、青口・二本松・大橋の陣を強化して抗戦すべく備

えた。藩主武聡は4月以来病に臥し、重臣達は謀り密かに武聡、夫人寿子^{ひさこ}、世子熊若麿^{せいしくまわかもろ}を退城させた。そのことが藩士にのみならず、他藩にも知れると動揺がおき、議論百出の結果、城と武家屋敷を焼いて退去し、再興を期すことになった。この前後の動きについては『涕淚余滴』^{てき}『廉々記』^{かどかどき}『御軍役諸事覚日記』『町方役用帳』^{かわばたかげおか}『先考河鰭景岡』等に詳しい。

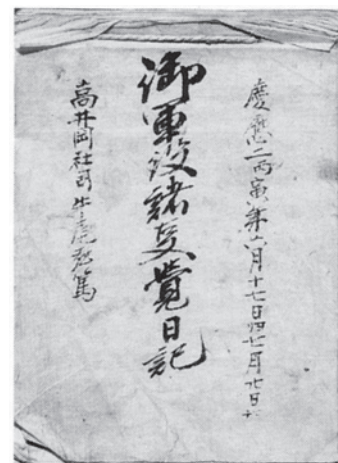
生田精^{いくたくわし}に背負われて城を出た武聡は先に退出していた夫人たちと唐鐘浦で合流し、和木の小川邸で休息後、松江藩の汽船に救助され、夕刻には杵築^{きつき}(大社)の藤間邸に入った。一方、藩士達は陸路や船で唐鐘に集結した。廉々記は「船積み専ら世話致し、唐鐘浦えと乗船す間もなく御城より火煙上り胆^{きも}を砕くの心地^{らくるい}し落涙しながら……」と記している。

17日の弘篤日記では、長州との和睦応接が不調との報せをうけ、各々詰場で討ち死を決意したが、一夜あけると昨夜の空気は一転し、台場には無力感が漂った。午前10時前には、藩主退城と台場引揚げ^{げち}の下知があり、大砲処置に忙殺され、弘篤は台場にあった具足を長持に入れて武器役所へ運ぶことを命じられる。途中、疲労^{こんぱい}困憊^{とねり}して引揚げてくる藩士や本多舎人・服部伝左衛門らの帰陣にあい、彼らと一緒に大橋を渡った。蘭館橋(大手橋)のたもとで、松倉丹後の従者が槍、鉄砲をもち控えているのを見て、急いで徒目付^{かちめつけ}の指示で運んできた長持を荻野流調合^{おぎのりゅうちょうあい}場の納屋に納め、岡田門から演武場へ帰った。

そこにいた社人たちと今後の対応を話し合い、



青口台場跡 (原井町)



御軍役諸事覚日記
(個人 蔵)

懇意にしていた藩士宅を訪ねて激励し、岡田の裏門から堀町、河原町を通して田町御門口へ出た。そこに星野百助^{ももすけ}らに率いられた一隊がいたが、その間を櫟田原^{いちいたばら}、栃木の農兵が右往左往していたので、自分たちに従って逃げるように告げた。門口で町人たちに指図していた小森伝太に挨拶して田町へ出た。上府村へ落ち行く予定を変えて、社家地^{しゃきち}へ行くことにした。琵琶首・中芝付近では他藩士が落ち支度中で、中芝土手には福山藩中が多数休んでいた。社家地八幡に落ち着き、座敷から黒川・長沢・千本埤辺をおびただしい軍勢が引取るさまが見え、これ程の軍勢がありながら一矢も報いることのなかった無念さを語り合ううちに「黒煙天を覆いければ御城の名残残念ながら拝見せん……数千の雷鳴発する如く……其音には胸を打、ゆえんは胸をこがし何にたとへんかたもなく、我さへ此の如し。殿様始め家中の人々舟中陸路を往も無^{さだめ}し残念に思わるべし」とその時の胸中を述べている。

また『町方役用帳』には

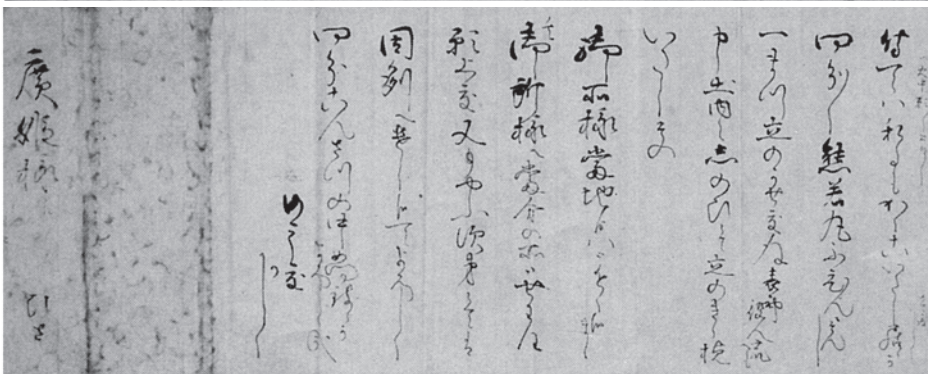
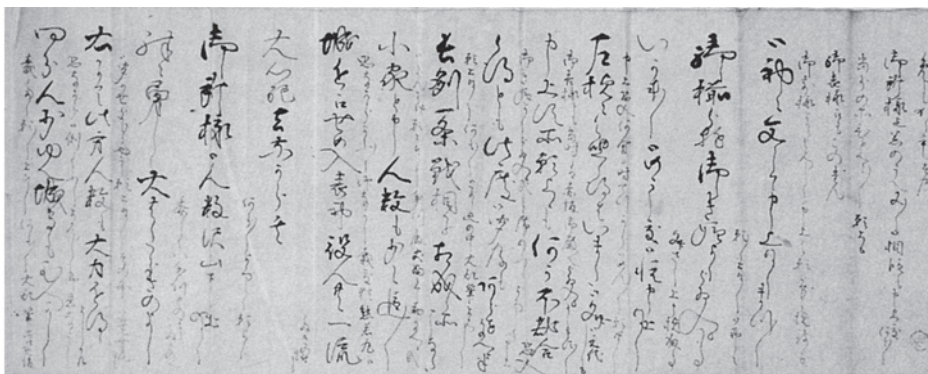
「其日(18日)七ッ時過より俄^{にわか}に破の板木鳴出すや否や直に御城・岡田屋敷・大橋・番所・秣^{まぐさ}小屋へは焼玉を以て大砲打込み夫々屋敷えも右の通焼玉大砲にて一時焼亡の結構目も気も天に飛び周章騒時言語同断」とか「砲発四方にとどろき今我家にもえつくありさま、町方のもの右往左往かけ出すゆえ身もたまらず、家内に道具は^{そのまま}其俣戸障子明けひろげ大戸も明けおき浅井迄駈^{かけ}欠、19日朝帰宅、家族は20日昼前帰宅」と町方の様子を記している。19日は雨天で焼方もろく郭内でもかなりの屋敷が焼残ったが、町方では土手町足軽長屋・川口番所・船小屋、新高部屋・笹屋町などが焼失している。



松平武聡
(『浜田会誌』第1号から出典)



武聡夫人 寿子
(『浜田会誌』第4号から出典)



松平武聡夫人寿子書簡

松江藩奥方熙姫(ひろひめ)宛の手紙。杵築の藤間家から差出されたもので、退城後の心情についても語られている。寿子夫人は7月24日に松江に入っている。

(浜田市浜田郷土資料館 蔵)

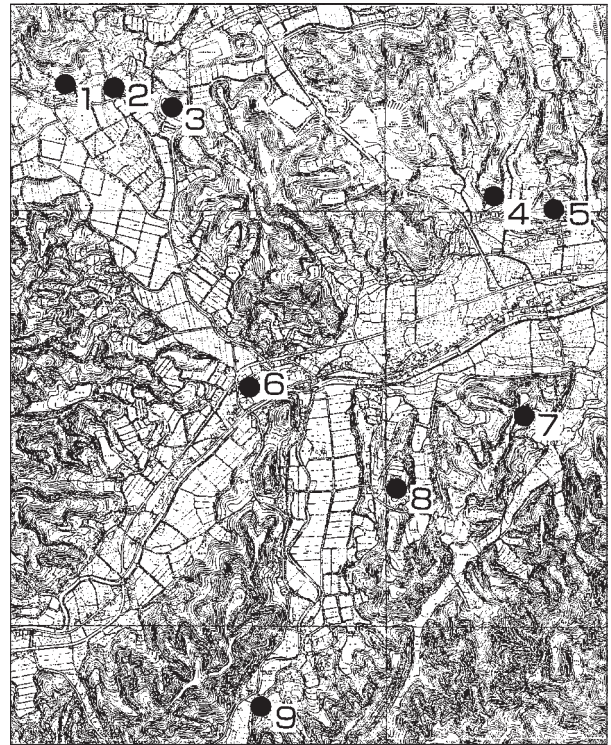
Ⅳ．浜田藩から鶴田藩へ

(1) 鶴田藩

杵築^{きつき}の藤間家に落ち着いた武聡等は、7月24日には松江に移り、松江藩の好意により家老三谷^{こんだゆう}権大夫の下屋敷を本陣とし、壮年の家臣たちは城下の洞光寺・徳泉寺・円城寺・善光寺・極楽寺・別願寺・善覚寺の7ヶ寺に分宿して再起をきし、婦女子、老人、未成年者は約300km離れた美作(岡山県)の飛領地八千石の地をめざして安来－根雨－四十曲峠を通して、第1陣は8月12日に到着、以後9月中旬までに約3千人もの多数が17ヶ村の民家に間借りの状態で苦難の生活に入った。ちなみに岸新六(静江跡継)の家族6人は8月27日に境村の本田徳蔵の家に入っている。

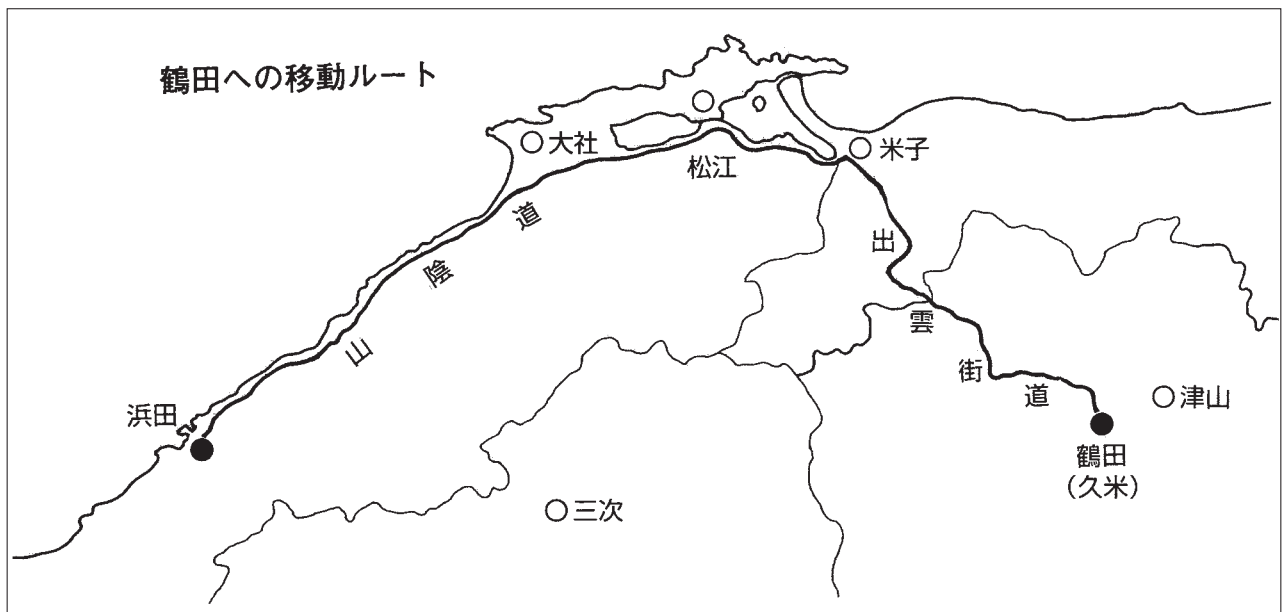
8月10日、藩主は実兄である鳥取の藩主の進言によって、松江に留まり、夫人寿子^{せいしくま}と世子熊若麿^{わかまる}は鳥取に移った。幕府からは金千両、米千俵^{かし}の下賜があり、家臣たちにも配分された。12月には浜田に立戻るまで米2万俵が渡されている。松江に寄留^{きりゅう}した家臣たちは、失地回復に備えて武器の購入、訓練に励み、9月3日を期して反撃を企てたが、14代將軍家茂^{いえもち}の死去や実兄慶喜の15代將軍就任、さらには征長停止の勅命が下されたために幕府もそれを許さず、この計画は挫折した。加えて12月には孝明天皇の死去により、翌3年(1867)1月に解兵令が出さ

れ、浜田へ帰る道は完全に閉ざされた。この間、藩では石州口^{ろんこうこうしょう}の戦いの論功行賞を行い、松倉丹後は50石加増(即日辞退)と感状、岸新六にも



久米町里公文周辺図

- | | | |
|-----------------|---------|--------|
| 1. 仮役所跡 (善福寺) | 2. 本陣跡 | 3. 馬場跡 |
| 4. 西御殿跡 | 5. 東御殿跡 | 6. 藩校跡 |
| 7. 総合仮役所跡 (慈恩寺) | 8. 練兵場跡 | |
| 9. 岸新六の墓 | | |



10石加増と感状が渡されている。幕府より美作の自領へ移動の指示あり、3月20日から移動を開始し、武聡は22日に松江を出立、26日には里公文^{さとくもんなか}中村大庄屋福山元太郎邸^{たつた}に入って、ここを本陣とした。久米町史によると、のち藩名を領内の鶴田にちなんで「鶴田藩」と改めたという。6月9日には夫人寿子、熊若磨も鳥取から移ってきた。作州に入ると直ぐ藩校道学館を再興し、本校のほか支校6校を設けている。

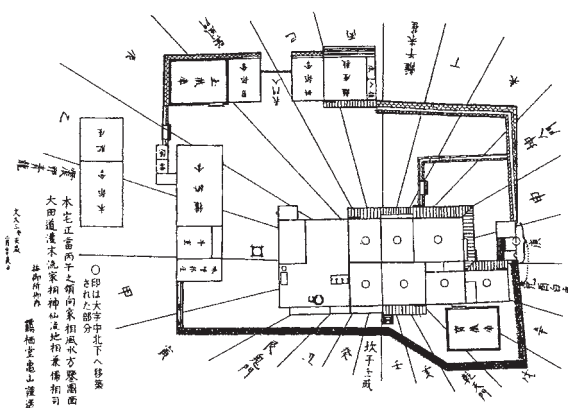
慶応3年(1867)10月、慶喜は大政奉還を願出、12月には王政復古宣言がなされるなかで、翌4年1月には鳥羽伏見の戦いが起きた。

藩からも佐野鎮太郎^{しづたろう}・伊藤梓^{あずさ}の両隊51人が幕府軍に加わったが、このことは、藩主は病気のため関与せず、として尾関隼人ほか3人の重臣が鳥取、岡山両藩主を通じて謝罪切腹を願い出た。朝廷の指示により尾関家老は4月19日に京都本願寺^{ほんこくじ}で切腹し、藩は事なきを得ることができた。また5月15日には江戸で脱藩者95人^{うえのしょうぎたい}が上野彰義隊に参加するなどの動きもあった。

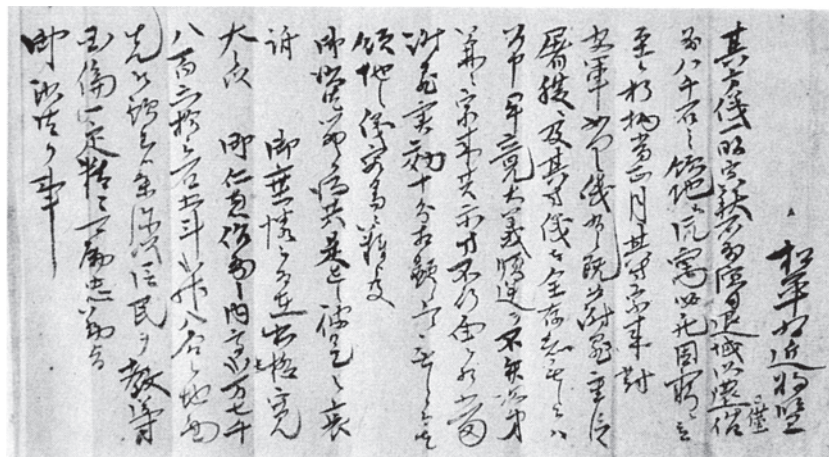
この頃は全国的に一揆が続出しており、5月10日に約2万8千石の地が鶴田領に加わったが、これと一緒に竜野藩内で紛争中の騒動(鶴田騒動)も背負いこむことになった。



本陣跡(現 近光邸)

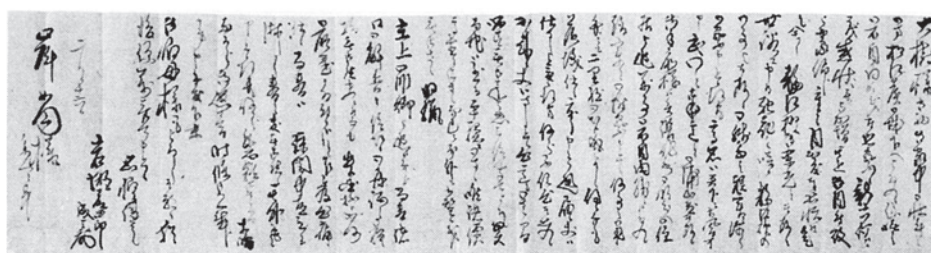


本陣建物平面図(『久米町史』から転写)



松平右近将監家御沙汰控書

鶴田藩領地の困窮につき、慶応4年朝廷より2万石余り加増された。



慶応3年岩瀬藤四郎氏書状

2月16日付けで如円に宛た手紙。松江での藩主や岸新六のようすや江戸のようすについてもふれられている。(一部)

(2) 岸 新六と鶴田藩

慶応4年(1868)9月、一世一元の制により明治と改元、江戸が東京となり、翌年には版籍奉還、戊辰戦争終結、そして明治4年(1871)の廃藩置県と急激な施策が相次いで行われている。

こうした動きの中で、鶴田藩でも改革が行われるが、明治2年(1869)9月15日には蔵米^{くらまい}24,801石余が下賜され、旧高^{きゅうたか}6万1千石に回復した。版籍奉還をうけて、藩主は藩知事となり、家老^{ようじん}・用人^{ものがしら}・物頭^{おおこしやう}・大小姓等の呼称を廃し、参事・大属・小属・史生等に改制された。同3年(1870)9月、政府は藩制改革を布告しているが、それによると鶴田藩は中藩に位置つけられ、藩庁には知事・大参事・権大参事・少参事・大属・権大属・少属・権少属・史生を置くことにしている。静江の家督を継いだ岸新六は、同3年10月には鶴田藩大属^{にん}に任じられ、民事長専任、民事専務たるべき事とみえている。

今一つの改革は明治3年1月の軍事改革であるが、それも翌年には休業当分の間屯兵を止めている。

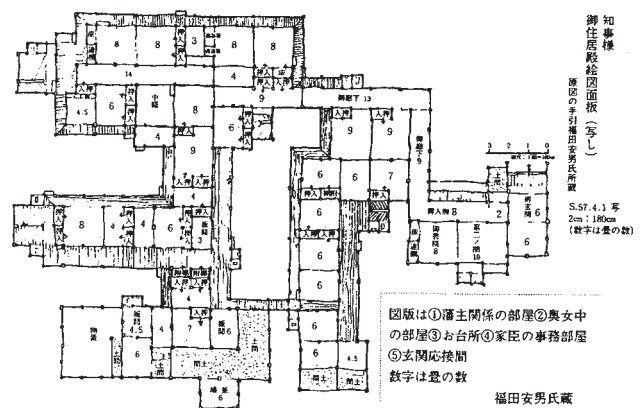
^{さとくもん}里公文中の福山邸を本陣としていたが新居建築にかかり、明治4年6月28日に西御殿に移った。絵図面版によると5棟38部屋の規模である。しかし、8月23日には武聡が知事を免じられ上京したため、わずか2ヶ月足らずの西御殿の存在となった。同所には明治23年(1890)4月に「殉難碑」が除幕され、以降毎年招魂祭が欠く事なく現在まで行われている。

この西御殿に対し、藩庁舎は作州移住以来、公文・鶴田・大戸の3ヶ所に仮役所が分散して

いたため、これを廃止して、明治3年4月に桑山村の慈恩寺を総合仮役所とした。そして東御殿を新築する予定であったが、完成を見ないうちに藩は解体された。現在は東御殿の名が残っているに過ぎない。



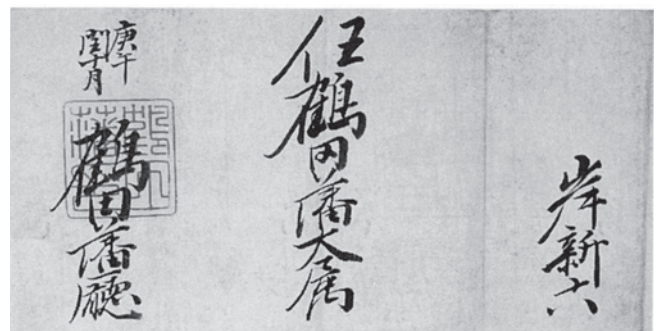
西 御 殿 跡



西御殿建物平面図 (『久米町史』から転写)



岸 新 六 之 墓



岸 新 六 辞 令

あ と が き

本展覧会及び図録の作成にあたり、次の社寺・各機関並びに各位の御協力を得ました。
厚くお礼申し上げます。

(敬称略、順不同)

久米町教育委員会

光西寺(川越市)

聖徳寺(浜田市)

高井八幡宮(浜田市)

益田市教育委員会

益田市歴史民俗資料館

浜田市立松原小学校

山口市歴史民俗資料館

牛 尾 擴 子

楫ヶ瀬 忠 男

木 原 光

近 藤 哲 城

新 松 晴 美

田 原 重 穂

俵 元 恒

土 田 祐 太

藤 間 亨

長 田 礼

中 田 洋 子

仁 木 康 治

肥 塚 健 二

肥 塚 由美子

■本書は世界こども美術館において開催した「浜田のたからもの 一浜田の武士・岸静江一」(平成9年9月6日～10月26日)の展示解説書である。

本書の編集は浜田市教育委員会生涯学習課・原裕司が担当し、執筆はⅠ章を原、Ⅱ章(1)・Ⅲ章(2)～(3)を神山典之氏、Ⅱ章(2)・Ⅲ章(1)を的場幸雄氏、Ⅲ(4)・Ⅳ章を桑原韶一氏が行った。なお、本書の編集及び写真提供について神山氏の御協力をいただいている。

■表紙写真 慶応二年合戦之取合図

